

博士論文執筆経験談

平成20年3月修了生 田中 愛

本稿では、博士論文執筆経験談として、主に作成過程で悩んだことについてお話したいと思います。

1. 自分の立ち位置

私は教員経験のないまま本研究科に入学しました。そのため、「教育とはこうあるべきだ」、「こうすれば良い」、「こんなことはすべきでない」などと、簡単に言うてはいけないと思っていました。研究する人の立場から言えることが、実際に学校で教員をしている人の実感にそぐわなかったり、現実的に無理な要求であることがよくあるように思ったからです。ただ、私は教員ではありませんでしたが、生徒として、小学校からの16年間、体育授業を受けてきました。その目線から言えること、言っても良いこともあるのではないかと、とも思っていました。3年間この悩みは尽きませんでしたし、今でも解決できたとは思いません。これからもずっと考えていくことだと思います。

また、私の所属する分野は「体育・スポーツ哲学」という分野です。文字通り、体育・スポーツを哲学的に考察していこうという領域です。自分の立ち位置が哲学に関わる分野だったということも、先程挙げた悩みと関連するのかもしれない。哲学の姿勢が、「こうあるべき」という理念を考えることや、論理的に「こうであれば、こうならざるを得ない」という方法で物事を考える姿勢ですので、「現場の実際問題」と大きく隔たってしまう危険性を孕んでいます。その危険性は、すでに「教育哲学」の世界では指摘されていて、教育哲学研究が、「〇〇という思想家の××論について研究すること」に終始していることを激しく批判している論稿を読んだこともありました。

2. 格闘

上のことからお解りの通り、とにかく、研究することと体育の授業をすることとの関係はどうなっているのか、ということが、論文を書くためにもぜひ知りたいことでしたので、自分なりにこの問題と格闘していました。まず、3年間よく大学の体育授業に潜り込ませてもらい、スポーツも続けました。また、2年生の時には、副指導教員の先生のご紹介で、週に1回、中学校の体育授業をさせてもらいました。TTでしたので、仕事仲間と授業案を作り、よく反省会もしました。そのうちに、どうしても教育観（体育観？）など研究に関わる話にもなり、「運動技能を身につけさせるこ

とを目標にしているのか?」、「どうしたら楽しんでもらえるか?」、「楽しいだけの体育でいいのか?」と、結論の出ないことについて意見を出し合うことが多く、そこから論文に対する大きなヒントを得ることもできました。何より、中学生と体育をすることで、何が本当に問題か、具体例はどんなことがあるかを見つけることができました。

3. 交流

千葉大学での院生生活については、連合大学院生控え室と指導教員の研究室で過ごすことがほとんどでした。色んな人と出会えたことも財産となりました。体育の中でも違う分野の生理学の人たちとは、同じ体育なのに全く世界が違っていて、彼らと自分は何がどう違うかを考えさせられました。そのことで、自分の立ち位置がよりはっきりしてきた気がしています。また、体育だけでなく社会科、音楽科、家庭科、教育学、教育心理の先輩後輩、同期もいて、刺激をたくさん受け、また支えてもらいました。他の教科の人に、「どんな研究しているの?」と聞かれて、説明しながら自分でも探すことがいいトレーニングになったと思います。

4. どんな論文を目指したか

「教育のハウツー本を書くのではない。」この言葉は、私がまだ卒論生の頃に指導教員の先生から言われたことです。確かに、現職経験のない私にはハウツー本を書く資格も能力もありません。しかし、だからと言って理論研究に走り、「〇〇という思想家の××概念の研究」だけではできませんでした。きっと、その種の研究にも学問的に大きな意義や価値があるとは思いますが、それはあまりにも「体育授業」から離れ、何より「やりたくなかった」のです。では、私は一体何がしたいのか。今のところそれは、「体育授業を作る上でヒントとなるような観点の提示」ということです。この中途半端な言い方を説明するには、いまだに大変苦労します。私の論文の内容で言えば、「他人に配慮することが、身体レベルで起こっていることだと明示すること、それゆえに、体育授業で扱う運動技能の中に、他人への配慮を育てる可能性がある」と示すこと」でした。

これからは、この論文を批判検討しつつ、具体的な授業を実際に展開しながら応用的な論文を書くことが、これからの私の課題だと思っています。